南西壁面にソーラーウォール設置

壁の断熱厚540㎜　第1号住宅、近く北見市内で竣工

「無暖房住宅」への挑戦

第3回

ウッディホーム木舎（美幌）

開口部は木製サッシの二重窓

自然素材に拘わるエコロジー住宅

「無暖房住宅」の取り組みを紹介するシリーズ企画の第3回は、ウッディホーム木舎（本社・美幌町、梅津敏行代表）。今春から独力で取り組んだ無暖房住宅の第1号が北見市内で近く竣工する。一見して驚かされるのは615㎜の壁厚。グラスウール540㎜厚を2層に分けて吹き込み、開口部はトリプルとペアのガラスを組み合わせた木製サッシの二重窓。南西の2階壁面には集熱装置のソーラーウォールを設置している。内装は全面、漆喰仕上げ。省エネと自然素材に拘ったエコロジーでスロウな家づくりが共感を呼び、「無暖房仕様で3棟の受注が決まっている」（梅津代表）という。

地元の工務店で大工の腕を磨いた梅津氏が96年8月に創業した。独立のきっかけは、偶然に知り合ったドイツ人建築家の言葉だった。住宅産業の常識を覆すその発想がエコロジー住宅の夢を再燃させた。

名刺の肩書は「舎長」。今春から暖房器具に頼らない無暖房住宅を独学・独力で模索してきた。チラシを見て問い合わせの電話が掛けてくる顧客の多くは「（無暖房住宅というからには）寒いんでしょう」と聞くという。

そんな素朴な疑問をきっかけに、エコロジー住宅に対する持論を説き、少しずつ「木舎ファン」を広げてきた。

ブラインドで日射熱を制御

北見市ひかり野で建築工事が進む同社の無暖房住宅第1号は、在来軸組工法の2階建住宅（延べ床面積115・5㎡）。

まず驚かされるのは壁の厚み。グラスウール32Kを2層に分けて吹き込み、断熱厚は540㎜。漆喰の下地（モルタスI）と耐久性の高い塗り壁（オメガアクロフレックス）で仕上げた壁厚は615㎜に及ぶ。外張断熱は外装材のダオリや音のタイコ現象に不安が残ることから、床に先張りしたカラマツ合板28㎜の上に2×4材を立てて室内側にフカし、内装の下地とした。

出窓のような深い懐を持つ開口部はトリプルとペアのガラスをはめ込んだ木製サッシの二重窓。中間にブラインドを設け日射を制御する。

基礎はベタ基礎と布基礎の併用。布基礎の立ち上がり両面にスタイロフォーム50㎜を打ち込んだ。天井はグラスウール35Kを700㎜厚までブローイングした。

冬期間も集熱温度は65℃に

南西の壁面を集熱装置として活用しているのも特徴。2階には窓と同じサイズのソーラーウォールを設置。黒色のアルミパネルで集めた日射熱は冬期間でも約65℃にまでなるといい、ダンパーやファンを使って居室の暖房用に取り込む。

ソーラーウォールは、造作した枠にアルミパネルを嵌め込み、普通ガラスで覆っただけ。システム品の半額に抑えた。

南西の1階壁面には床から2100㎜の高さまで縦長の窓を設け、壁際の床面に貼ったテラコッタタイルに日射熱を蓄熱させる。

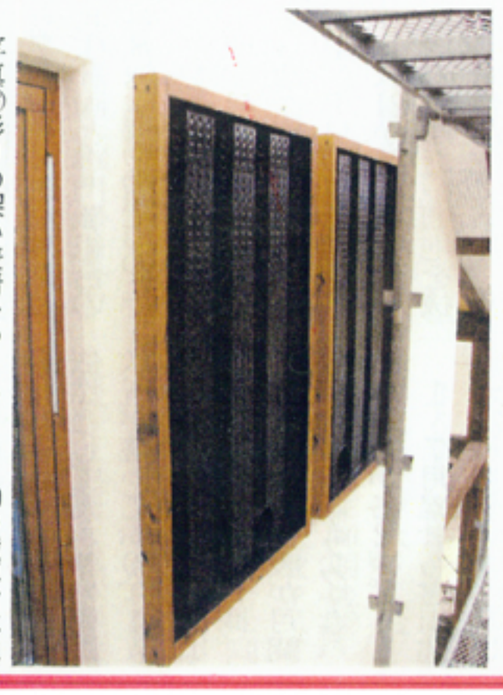
施主の理解と協力を得て、補助暖房は床下のパネルヒーターのみ。今冬は可能な限り暖房を稼動させず、無暖房仕様の効果を確かめたい考え。

内装は手造りの漆喰仕上げ

内装は全て、昔ながらの海草糊で練った漆喰仕上げ。土台はヒバ。床はナラとパインの無垢材。内装ドアも手造りで、自然素材に徹底的に拘る。屋根はファイバーグラスのシングル屋根材（オークリッジプロ）。換気は、局所排気用にセンサー付きのパイプファンを設けたほか、615㎜の壁厚を生かし熱交換型の自然給排気口（グッドマン）を各室に設置した。

建築工事費の坪単価は約65万円。他社に比べやや割高だが、「（工事費に見合った）家づくりの価値観に気付かせることこそが工務店の仕事」（梅津代表）だという。

「生涯所得の4分の1近くを投じる家づくりを安易にプロ任せにしてはいけない」（同）。単に性能値や経済性に頼らない本物の家づくりを「一緒に勉強しよう」と説く梅津代表の姿勢が共感を呼んでいる。



写真㊨彫りの深い表情をつくる615㎜の壁厚、写真㊧南西の2階壁面に設置されたソーラーウォール